

氏名（本籍）	陳 婉瑜（台湾）
学位の種類	博士（国際日本研究）
学位記番号	博 甲 第 9664 号
学位授与年月日	令和 2 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日中文学における異類—「蛇性」の表象をめぐって—

主査	筑波大学 准教授	博士（学術）	平石 典子
副査	筑波大学 教授	博士（学術）	石塚 修
副査	筑波大学 教授	博士（宗教学）	津城 寛文

論文の要旨

本論文は、日本と中国の人間の男性と蛇との異類婚姻譚における蛇の表象、役割、人間との関係性に着目し、これらの物語の検討を通して日中文学における「蛇性」表象の変容とその意味を分析・考察したものである。論文の構成は以下の通りである。

序 章

第一章 蛇をめぐる日中の言説

第二章 蛇にまつわる日中異類婚姻譚の翻案と改作—「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の姪」をめぐって—

第三章 20世紀後半の文学作品における「蛇女」のイメージ

第四章 女性作家が描く異類婚姻譚

終 章

参考文献

序章で日中における「異類」の定義が概観され、研究背景と研究方法、本論文の構成について述べられた後、第一章では蛇をめぐる日中の言説と異類婚姻譚の類型、先行研究がまとめられている。中国と日本の神話や伝説においては蛇との交婚譚や蛇を祖神とする話が数多く存在し、大地母神、豊饒神も蛇神と結びついていることが指摘される一方、日中の近現代文学においては、ヨーロッパにおける蛇のイメージの影響があることも述べられる。また、先行研究を参照しながらまとめた異類婚姻譚の類型から、多くの異類婚姻譚には人間への報恩譚との繋がりがあがるものの、結果的に異類は人間の世界に永住せず退去、追放、殺害という三つのパターンのいずれかを踏襲するケースが多いことを指摘している。さらには、蛇との婚姻をめぐる物語の大半が悲劇に終わることに着目し、異類が女性の場合には自ら退去し、または追放される形で話は終わるが、異類が男性の場合には、また来襲する危険があると考え、殺害して話は終わるという特質があるとの指摘や、男性中心の倫理観が異類婚姻譚に投影している点、異類女房譚の女は善玉役と悪玉役に分類される点を重要視している。

第二章では、日本と中国の蛇にまつわる異類婚姻譚から、後世の蛇物語に多大な影響を与えた馮夢竜「白娘子永鎮雷峰塔」(1624年)と上田秋成「蛇性の姪」(1776年)を取り上げて分析・考察が行われる。白蛇が女性に姿を変え、人類の男性とのロマンチックな恋物語を展開する「白蛇伝」の初めての小説化である「白娘子永鎮雷峰塔」と、その翻案といわれる「蛇性の姪」の関連性については、先行研究も多数存在するが、本論では異類と人間との関係に着目してこの二作を改めて分析・考察し、人間の女性に変身する蛇を主人公とする意味や役割を明らかにしようとしている。そして、蛇であることが露見した後の両作の違いを取り上げ、「白娘子永鎮雷峰塔」では、対話を試みる白娘子に対して許宣が酷薄な態度を取ることで、愛情を追い求め、男性に献身的な女性として描かれる白娘子が同情される対象にもなっていること、一方、白娘子と比較しても対話の機会と言葉を奪われた「蛇性の姪」の真女兒は単なる妖蛇とされることを指摘し、真女兒の恐ろしさが際立つこの物語においては、男性主人公の豊雄は自分を単なる被害者とすることをためらわず、夢見がちで現実に向き合う勇気がない、という自分の弱さと向き合うことがないことを明らかにしている。

第三章では、1970年代、80年代に発表された日本と中国の現代文学作品から、蛇とされる女性と人間の男性との異類婚姻を扱った作品である中上健次『蛇淫』(1976年)、水上勉『白蛇抄』(1982年)、ラウ・イーチョン(劉以鬯)『蛇』(1978年)を取り上げ、前章で論じた「蛇女」の表象や役割とこれらの作品を比較しながら、人間の女性が蛇女として見なされる原因と物語におけるコミュニケーション不全の問題などについて探求している。『蛇淫』、『白蛇抄』、『蛇』においては、ヒロインたちは皆人間の女性であるにもかかわらず、彼女たちが性に積極的であり、その魅力によって男性たちをひきつけるためにいずれも周りから妖蛇であるとされる。この点について性的魅力を発揮する女性は「男好き」で「淫乱」とされて執着、淫欲、妖気などをその特徴とする妖蛇のイメージに重ねられることを指摘する本論は、その原因を登場人物間のコミュニケーション不全にみる。そして、これらの作品において、難聴や無口、強迫観念、といったことから女性とコミュニケーションがとれなくなった男性が、相手が「蛇」という異類と断じることによって、コミュニケーション不全を正当化し、悲劇の責任を女性に転嫁していることを明らかにし、この構図が「蛇性の姪」と同様であることを指摘している。また、『蛇淫』と『白蛇抄』において、いずれも年長の女性がヒロインを「蛇」とみなしていることの重要性にも本論は注目し、男性ではなく女性がヒロインを断罪することで、ヒロインがコミュニティー全体から排除されると読み解いている。

第四章は、主に1990年代以降の女性作家たちが「蛇女」をどのように描き出したのかについての考察である。フェミニズム研究やジェンダー研究の知見を取り入れながら、李碧華『青蛇』(1986年初版、1993年改訂)と、坂東真砂子『蛇鏡』(1994年)、川上弘美『蛇を踏む』(1996年)、本谷有希子『異類婚姻譚』(2016年)を取り上げ、蛇のイメージと役割、女性の表象にどのような新しい視点が盛り込まれているか、といった問題を追究している。本論は、この四作に共通する点として、ヒロインたちが伝統的な女性像から逸脱し、女性の自覚と発話権が現れることと、物語が悲劇になるとは限らないことを挙げ、これらの作品が家族の多様性とセクシュアリティの多元性を示すことにも成功していることを明らかにしている。

以上の考察から、本論は日中の文学作品における「蛇女」の表象が、作品が書かれた時代の日中の社会規範の中でのあるべき姿から逸脱する女性を描いたものであり、1970年代においても健在であったその構造に変化がみられるのが、女性作家たちが新たな蛇女の物語を紡ぐようになった1990年代であると結論し、社会における女性のあるべき姿の変化が、文学における新しい「蛇性」を生み出していくと述べている。

審査の要旨

1 批評

本論文は、これまで特定の作品研究としてしかなされてこなかった、日本と中国の「蛇」とされる女性の文学における表象研究について、神話や伝説における両国の蛇の表象から2010年代の作品までを包括的な視点で考察を行うことで、そこに一本の線を見出そうとした、意欲的な研究である。筆者は後世への影響の大きい蛇馮夢竜「白娘子永鎮雷峰塔」(1624年)と上田秋成「蛇性の姪」(1776年)を出発点と位置づけ、1970年代、80年代の日本と中国(香港)における重要な作家である中上健次、水上勉、ラウ・イーチョン(劉以鬯)の作品(『蛇淫』(1976年)、『白蛇抄』(1982年)、『蛇』(1978年))がいずれも男女のコミュニケーション不全の悲劇でありながら、コミュニティーが人間の女性を「蛇」とみなすことによって物語が異類婚姻譚となり、男性が免責されるという効果をあげていることを明らかにする。さらには、主に1990年代になってから女性作家たちが発表した蛇の物語から李碧華『青蛇』(1986年初版、1993年改訂)、坂東真砂子『蛇鏡』(1994年)、川上弘美『蛇を踏む』(1996年)、本谷有希子『異類婚姻譚』(2016年)を取り上げ、これらの作における蛇の表象が、それまでの「蛇女」とは決定的に異なるものであり、新しいメッセージを発信していることを示している。筆者の地道な日本語および中国語の資料の渉猟と、西欧のジェンダー、セクシュアリティ研究の知見も取り入れた分析・考察は、これまで比較文学研究などの分野において論じられて来た日本と中国の文学作品における「蛇女」の概念やその意味・意義をめぐる議論に新たな知見を示すものである。また、本論文は「蛇」とされる女性の表象の変容が、それぞれの社会での規範にとらわれてきた女性表象の変容でもあることを明らかにしており、こうした観点からも、関連する研究分野の進展に寄与するものであるといえる。

一方で、本論文の重要な概念である「蛇性」については、その日中での違いや、「蛇性」の両義性についての分析などの点で、まだ不十分な点があることが指摘された。また、論文の中で先行研究に言及する際、その先行研究が研究史の中でどのような意義をもつものなのか、という点について十分に説明されない点も挙げられ、日中文学における「蛇性」表象の変遷と意義を明らかにするためには、研究史のより緻密な整理が待たれることが指摘された。これらの問題については、今後の研究の深化の中で解消されることが期待される。

以上のように、本論文には改善されるべき課題もあるものの、その中で導き出された種々の新知見は、学界に対する大きな貢献であり、本研究の成果は、優れたものであると判断される。

2 最終試験

令和2年7月14日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(国際日本研究)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。